



カナダ UBC における共同研究： 前近代東アジアにおける国際関係の多面性

ホ・ナムリン
許南麟（ブリティッシュコロンビア大学）

本共同研究はブリティッシュコロンビア大学（以下、UBC）にて5年にわたって行われたもので、2018年の12月をもって終了する予定である。研究代表者（筆者）を含め、この共同研究の中心的なメンバーとしてカナダ・アメリカ・韓国の大学から4人のメンバーが参加しており、5人体制を基本としている。その他、研究アシスタントとしてUBCの大学院生が数名参加している。

「一国焦点の壁を乗り越える」というキャッチフレーズのもと、5人のメンバーが15世紀から20世紀前半期の国際関係につながるそれぞれのトピックを選び、各々の書き下ろした英文単独著書（モノグラフ）と3編の論文を出版することが本共同研究の目標である。この研究は外部の研究支援金を受けて進められており、現時点において単著2巻および7編の論文が出版されている（写真1）。



写真1 出版されたモノグラフ

本共同研究は2018年の12月に終了するが、それ以後2年間のうちに目標とした全ての研究結果を出版しなければならない。現在、残りの単著3巻の原稿はほぼ完成に至っているので、目標達成の見通しが立っている。これらを鑑みると、この共同研究で目指しているものが研究成果の出版というたった一点に集約されていると言っても過言ではない。これについて、多少異様であると思われるかもしれないが、後述するような背景がその理由と関連している。

著書プロジェクトで取り扱ったトピックは15世紀の中国と朝鮮を含む東アジアの国際秩序、16世紀末の豊臣秀吉による朝鮮侵略、17世紀に残された明軍の後裔たちの朝鮮帰化過程、18世紀の清と朝鮮との国境問題、そして19世紀末から1945年までの仏教を通じて見る日本と朝鮮との文化接触などがある。一見するとあまり重なる領域がなさそうに映るかもしれないが、他者への支配欲・越境・接触・葛藤・共存などのキーワードを用いて考えると、本共同研究の全体像が浮かび上がることだろう。

北米における人文学分野の共同研究には特色がある。共同研究とは言え、同じ大学の教員が集まって共同で行うプロジェクトはあまりない。これは大学側が共同研究を名目として研究費を与えることがない状況に起因する。その上に、アジアを対象とする研究者が数少なく、共同で研究できるトピックを選定することが困難である。日本史の分野で言えば、多くとも前近代史を一人、近現代史を一人で担当する体制であり、一つのチームを作って共同研究をすることは難しい。

それゆえ皆個人プレーをすることになる。それは自由なプレーでもある。一人の研究者が自分の研究を中心に据えて外部の研究支援金を受け、外部から研究者を集め、遠距離共同研究チームを作って辛うじて共同研究を進めるのが普通である。しかし、遠距離共同研究チームが作られる程の支援金を確保することは容易ではないため、実際に共同研究をしている例は稀である。

5年間の共同研究で一番大きなチャレンジは、5本のモノグラフを5年、遅くとも7年以内に名声のある大学出版社で出版することである。北米で1冊のモノグラフを出版するには、少なくとも10年以上かかると思われる。原稿が完成し出版社に提出してもレビューと修正などを含め、全てが順調に進行された場合にも出版されるまで通常2年以上、遅い場合は4年もかかる。したがって、共同研究が始まる前の時点で、研究メンバーは既にある程度原稿を手がけていないと目標達成は無理である。

このような状況であるため、皆各自の原稿を書くことで精一杯で、定期的集まって「共同」研究をする形式を取りにくい。大概の場合は、年に1回程度集まる機会を設け、それ以外は遠距離で連絡を取り合い、本と論文の執筆に精進する。日本での共同研究とはかなり異なる様相を呈していると言えるだろう。

一方で、参加した院生たちの場合、UBCで頻繁に行われるワークショップや招請セミナーを通じて前近代国際関係に対する多様な知識を得ることができる(写真2)。共同研究の項目で次世代研究者育成をも義務付け



写真2 ワークショップの風景

ているため、このような学習の機会が提供されている。ワークショップや招請セミナーでは、一つのトピックに焦点を当てて集中的に議論してきたため、非常に効率の良い学習の場であったと考えられる。

これまで議論されてきた主題は極めて多様である。例えば、外交使節をはじめとして前近代のディアスポラや貿易、海賊、港町、旅行等が挙げられる。また、漂流民や、書物、漢詩、知識の移動に加え、「高麗茶碗」、儒教文化の比較、戦争の傷跡、国際条約、民間宗教、女性の地位、越境する舞踊、人参、古典など、様々な題材が選ばれている。

通常の場合、2日間の企画で朝から午後まで5回あるいは6回連続の発表セッションを設け、招請された研究者らによる発表が終わると、参加者全員で集中議論をする形式を取り入れている。このような企画を積み重ねることにより、前近代東アジア国際関係の多様な側面に関して理解を深めることができた。5年間開催されたワークショップはおおよそ10回に及び、集中セミナーの回数は15回以上にのぼる(写真3)。

その他には、他のプログラムの支援金を調達し、世



写真3 集中セミナーの風景

界各地から4年間35人の研究者を招き、学部の授業と一般向けの講演会を開いた。英語圏で前近代国際関係に関する研究に携わっている研究者を各地から招くことで、研究の現状を多面的な角度から学び、検討することができた。

今回の共同研究の経験を活かし、2~3年後にはまた5カ年計画で、近世から近代への変動期東アジアにおける越境する人・物・思想・芸術に関する共同研究を立ち上げたいと考えている。この共同研究もモノグラフの出版を主要な活動としつつ、東アジアから研究者を招いて集中セミナーを開くことに力を注ぎたい。特に、状況に合わせて日本語、中国語、韓国語でもセミナーを進行できると、より大きな成果を得ることができると期待している。無論、このような希望を叶えるためには、支援金の確保が欠かせないということは言うまでもない。